



余呉湖

余呉町文化財専門委員
白崎金三

余呉湖は、滋賀県最北の余呉町にある湖です。地球上では北緯 $35^{\circ}31'$ 、東経 $136^{\circ}12'$ 、海拔134mの位置にあります。標高424mの賤ヶ岳に登ぼって見ると、南西直下に琵琶湖が、北面直下に余呉湖が見え、賤ヶ岳によって両湖が隔てられていることがよくわかります。しかし余呉湖は琵琶湖より49mも高い所にあるのです。余呉湖は周囲6.7km、最も深い所でも13mの小さい湖ですが、賤ヶ岳の景観美には欠かせない湖です。余呉湖のはるか遠方には、福井・岐阜の県境にかけて1000m級の余呉の山々がそびえ、四季折々の景観を彩どり、賤ヶ岳山頂よりの眺めを一段と雄大にしています。

余呉湖の成因

余呉湖は琵琶湖と同じ時代に陥没によってできた湖といわれていますから、当時は琵琶湖と同じ水続きの湖であったのかも知れませ



賤ヶ岳より見た余呉湖

ん。その後の地殻の変動により、余呉川が流れ込んだ湖に变成了ようです。そのためか余呉湖は今も一級河川となっているので、余呉川の一部であったと思われます。湖辺の川並の集落もそうしたことから名付けられたのでしょうか。いつの頃からか余呉川の川筋がかわり余呉湖に入らなくなりました。ところが余呉川の伏流水が余呉湖の湖底より湧き出るようになったので、余呉湖は今までのように汚泥が流れ込むことなく、美しい湧水が満々とたたえられた神秘的な閉鎖湖となつたのです。そして波静かな湖面には、四季折々の山の景色を写し鏡を見るようであったので、以来人々から「鏡湖」の別名で親しまれてきました。

余呉湖と人の関わり

余呉湖周辺にはいつの頃から人が住みついだかは明らかではありませんが、昭和53年余

呉湖の湖底にあった推定2000～3000年前のものと思われる埋没林の株が掘り起こされた時、その下から縄文式土器の破片や、当時の人が食用としたと思われるクルミ・トチ・ハスの実などが、多数発見されました。これにより縄文土器



別名鏡湖の余呉湖

の時代以降には既に人が住みついていたことがわかります。

戦国時代には、周辺で幾度か戦いが交えられ、賤ヶ岳合戦には、傷ついた武将たちの血潮で余呉湖が紅に染められたと伝えられる幾多の悲話を残す古戦場となりました。

慶長年間に入ると幕府は大津代官彦坂九兵衛に命じ、余呉湖から余呉川への引尻川（高田川）を切り開かせました。そして余呉湖の水位を下げ、周辺に高59石の水田を拓かせました。これが今も残る川並新田です。これによって長い間閉鎖湖であった余呉湖に流れ出る川ができたのです。このため余呉湖と余呉川の水位が同じになり、余呉川の増水時には余呉湖に逆流し周囲の水田は水没し、人々は水害に悩むと共に水田の中でコイやフナを漁るという珍事もありました。

江戸時代になると船舟が発達し湖上交通が盛んとなりました。北国街道を運ばれてきた荷物や年貢米は、東北岸の江土で舟に積み湖上を西南岸まで運び、ここから飯の浦までを人や牛の背で、飯の浦からはまた舟で琵琶湖上を彦根や大津に運んでいたのです。幾内から北陸への荷物も同じコースで逆送されていました。そのほか漁や周辺田畠への農産物運搬用にも舟が利用され、明治・大正には周

辺の家でも舟を持つようになりました。

明治に入ると漁業組合ができ余呉湖は漁場として活用されてきましたが、昭和30年頃より本格的な開発の鍵が入れられ、余呉湖はその姿を一変することになりました。それは毎年余呉川の洪水に悩む下流の農業地帯を守るために、余呉湖をダム化し洪水のときの余呉川の水を一時余呉湖に入れおく治水工事です。

昭和34年余呉川上流から余呉湖へ巾20m延長1850mの導水路が開削されました。これにより流れ入る川のなかった余呉湖に再び余呉川が流れ込むようになったのです。更に余呉湖が琵琶湖より49mも高所にあることをを利用して、江北平野5050haの農業用水を確保するための大工事が施行されました。そのため余呉湖の水位は2m



舟だまり

余も常に上下することになりました。渴水期には余呉湖の水だけでは足りないので、琵琶湖の水をポンプで余呉湖へ逆流するようになります。今までヨシや柳で囲まれていた護岸は石やコンクリートで固められ、美しい湧水は余呉川や琵琶湖の水に置き変へられて、遂に余呉湖は神秘のベールを脱いで汚水に悩む湖となってしまったのです。

余呉湖の埋没林

昭和45年工事のため余呉湖の水が減水され

た時、北方の湖底から推定 2780 ± 110 年前の木の根や幹が36個確認されました。調査の結果直径2mにも及ぶカキ科の植物であることがわかりました。昭和50年には京都大学の堀

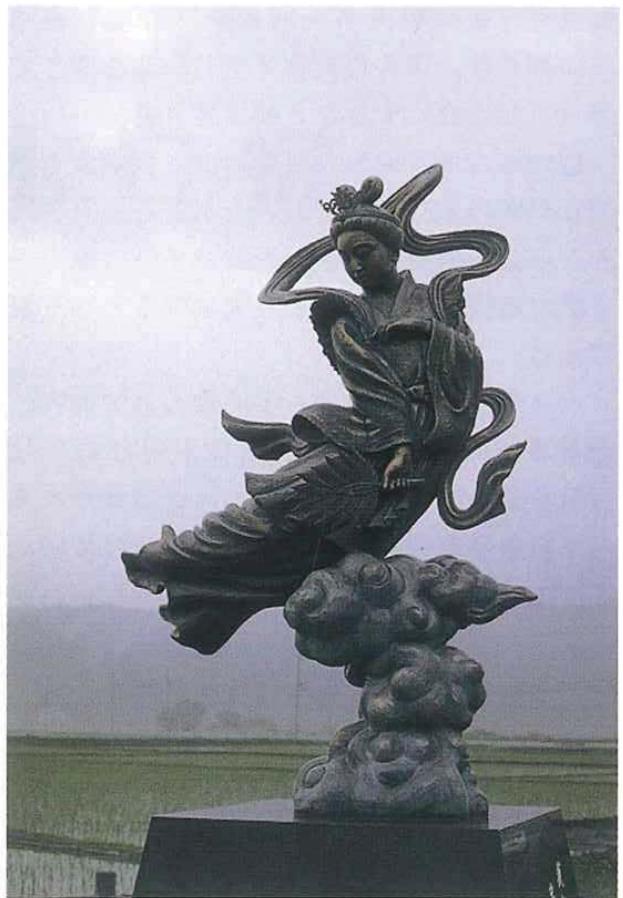


埋没林

江正治先生を中心にアメリカ・カナダ・アイルランド・イギリス・ポーランド・オーストリアなどの学者が立ち会い、更に調査が行われた結果、余呉湖北部の水田2m下からは推定 3230 ± 260 年前の、余呉湖新羅崎森南の湖底上部から推定 6520 ± 140 年前、その下約1mの所には推定 8060 ± 260 年前の埋没林のあることが確認されました。この調査によると、今から5000年以前の地球は乾燥期に入り、余呉湖の水も現在の6分の1くらいの面積まで減水した時期が1500～2000年続いたので、湖底は干あがり森林となったのです。その後また湿潤期となり余呉湖は増水して森林は湖底に没して埋没林となったのです。これは乾燥期と湿潤期を繰り返してきたことが地球の古気象を実証する貴重な資料となったのです。

余呉湖の伝説と文学

余呉湖は長い間神秘の湖として続いたためか天女伝説や菊石姫の伝説など美しい伝説が育み伝えられてきました。中でも天女伝説と言えば余呉湖、余呉湖と言えば天女伝説を思い出すほど余呉湖の天女伝説はよく人に知られています。余呉湖には渡来人により伝えられた北方の白鳥処女説話系と南方漁労民俗によって伝えられたと思われる南方系の二つの天女伝説が伝えられています。白鳥処女説話



余呉湖畔に立つ天女のモニュメント

系伝説は逸文風土記として帝王編年記に書き残されているもので、それは、

「古老的の伝へて日へらく、近江国伊香の郡
與胡の郷（余呉）伊香の小江郷の南にあり。
天の八女 俱に白鳥となりて天より降りて江
の南の津に浴みき。時に伊香刀美西の山にありて遙かに白鳥を見るに其の形奇異し因りて
若し是れ神人（天女）かと疑ひ往きて見るに、
實に是れ神人なりき。ここに伊香刀美即て感
愛を生して還り去り得ず。竊かに白き犬を遣
りて天羽衣を盗み取らしむるに弟（妹）の
衣を得て隠しき。天女乃ち知りてその兄（姉）
七人は天上に飛び昇るにその第一人は飛び去
り得ず。天路永く塞して即ち地民となりき。
天女の浴みし浦を今神の浦と謂ふ是れなり。
伊香刀美天女弟女と共に室家（夫婦）となり
て此處に住み遂に男女生みき、男二たり女二
たりなり。兄の名は意美志留、弟の名は那志
登美 女は伊是理比咩、次の名は奈是理比賣
此は伊香連（伊香郡開拓者）等が先祖に是

れなり。後に母即ち天羽衣を捜し取り着て天に昇りき。伊香刀美獨り空しき床を守りて
吟詠（ため息）すること断まざりき。」

他の南方系と思われるのは漁夫桐畠太夫が天女が柳の木に掛けておいた羽衣を盗り夫婦となって一男を生むが、天女は子守の歌う子守歌で羽衣のありかを知り天に帰るという説である。

余呉湖はまた古歌にも多く歌われており、今様歌謡集の「梁塵秘抄」にも近江の歌枕（歌を読む時の名所）としても余呉湖がある。

さえまさる伊吹の嵩の山おろし氷はてたるよごのうち海（夫不和歌抄）

きみが代のくもりなければ余呉のうみに月ものどけくすむにぞありける（江師集）

沖つりを明るひかりもほのぼのとかすみにうかぶよごの水うみ（後奈良院書）



山口誓子同碑

余呉湖畔には、芭蕉門下の斎部路通や現代俳人山口誓子が余呉湖でよんだ句碑も立てられており、また小説では水上勉の「湖の琴」の舞台にもなっている。

余呉湖の生物

余呉湖の魚類としては、昭和46年から48年にかけての滋賀県水産試験場の調査によるとワカサギ、タモロコ、ホンモロコ、スゴモロコ、ヒガイ、ゼゼラ、モツコ、アブラハヤ、ソウギョ、カワムツ、オイカワ、ハス、ギンブナ、ニゴロブナ、ゲンゴロウブナ、コイ、ヤリタナゴ、イチモンジタナゴ、シロヒレタビラ、アブラボテ、ドジョウ、シマドジョウ、

ナマズ、イワトコナマズ、ギギ、ウナギ、メダカ、ドンコ、ヨシノボリ。

貝類では、オオタニシ、カワニナ、タテボシ、カラスガイ、マルドブガイ、セタシジミ、ヌマガイ。

エビ類では、テナガエビ、スジエビ、ヌカエビと豊富であるが水産的対象となっているのは、ワカサギ、ホンモロコ、ギンブナ、ニゴロブナ、コイ、イワトコナマズ、ギギ、ウナギ、スジエビ、テナガエビ程度でした。それでも昭和56年頃には年間漁獲量、コイ13,900kg、フナ15,300kg、ウナギ620kg、モロコ470kg、テナガエビ1,070kg、ワカサギ1,000kg、雑魚5,200kgに及んでいましたが現在では余呉湖の環境変化により種類・量ともに減少してきたので、水産資源保護のためコイ、ウナギ、フナ、ワカサギの魚苗を毎年放流し遊漁に力がいれられています。釣り桟橋も完成され、ワカサギ釣りは余呉湖の冬の風



釣り桟橋

物詩となっています。

余呉湖の水鳥としてはカツブリは年間を通じて見られますが、冬鳥としてはマガモ・カルガモなどのカモ類が多く、時折余呉の鳥となっているオシドリなども見られます。時にはコハクチョウも降りてくるが餌がそれないのかすぐに飛びたってしまいます。

滋賀文化財教室シリーズ No.190号

発行年月日 1999年12月20日

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会

〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2

TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525